

パキスタン北部地域ゴジャール地区の 地域開発による生活の変化

落合 康浩* 水嶋 一雄*

Changes in Life Styles as a Result of Regional Development in Gojal, Northern Areas of Pakistan

Yasuhiro OCHIAI * and Kazuo MIZUSHIMA *

Abstract

The Gojal in the northern part of Hunza, Northern Areas of Pakistan, is located in parts of the Karakoram range and the Pamir plateau. This area is inhabited by "Wakhi", a Persian speaking ethnic group.

As the Karakoram Highway (KKH), which is the main route connecting Islamabad with China, had been constructed through Gojal, the benefits of road transportation and the inflow of foreign tourists changed the situations of agriculture, tourism, and life styles of the villagers. Additionally, the development was also quickened by the promotion of the Aga Khan Rural Support Programme (AKRSP).

In Hussaini village, the traditional agricultural system, based on the rotation system of wheat, barley, and peas has decreased, and potatoes (as a commodity) have become the main crop in recent years. Because of good accessibility to the main resources of mountain tourism in Passu village, several lodging establishments, shops, and vehicles are now owned, and almost all of the villagers have been engaged with tourism.

These changes in the region, however, are not suitable for the sustainable development of agriculture and tourism. For the future development of the region, intensive activities and efforts of villagers are necessary to establish a sustainable system supported by regional resources, *i.e.*, natural landscapes and the traditional culture.

Key words : Northern Areas of Pakistan, regional development, agriculture, tourism, regional resources

キーワード : パキスタン北部地域, 地域開発, 農業, 観光業, 地域資源

1. はじめに

パキスタン北部地域 (Northern Areas) は、連邦政府の直轄する地域で、同国北西辺境州のさら

に北東側に位置しており、北はアフガニスタンのワハーンおよび中国のシンチャンウイグル自治区と、南東部はインドとの係争地ジャンム・カシミールと境を接している (図1)。この地域はヒマ

* 日本大学文理学部

* College of Humanities and Sciences, Nihon University

ラヤ山脈西端部の北側，カラコラム山脈およびヒンドークシュ山脈からパミール高原へと続く山岳地帯にあり，中央部をインダス川およびその支流のギルギット（Gilgit）川・フンザ（Hunza）川が貫流している。それらによって刻まれた河谷の底部は，年間を通じて降水量の少ない乾燥気候であり，たとえば，北部地域の中心都市ギルギットの年間降水量は，150 mm 程度となっている。

このようにパキスタンの中でも辺境に位置し，過酷な自然条件下にある北部地域は，複数の少数民族が複雑に分かれて居住する地域でもある。これらの少数民族の生活については，たとえば，Weeks（1984）が，世界各地のイスラム諸民族について紹介するなかで，取り上げて記述しており，その大半は伝統的に牧畜と灌漑農業とを生業にしていることがわかる。生井（1982）はその紀行文の中で，北部地域の中でも最も北に位置するフンザ地方に行われる農業の形態について述べており，広島（1987）も，この地方の宗教や農業形態などについて紹介している。

フンザ地方は，山岳観光地としても知られ，近年，日本でも放送メディアによって地域の映像が紹介されるようになってきたが，この地方の生活実態に関する学術的な研究は必ずしも多くはない。しかしながらそれらの研究成果の中には，地域の変化について捉えているものもあり，たとえば Kreutzmann（1993）は，その社会経済的な変容の過程を分析し，それらの要因について考察している。また，子島（2002）は，フンザ地方の人々が信仰するイスラム教イスマイル派による NGO の地域開発の実態と影響について分析，考察している。これらによれば，フンザは，その「秘境」というイメージ通りの景観を保ちながらも，その地域社会の内部には着実に近代化が進みつつあることがわかる。

一方，フンザ地方の中でもさらに辺境に位置するゴジャール（Gojal）地区は，その中央部とは民族的にも，また位置的な条件でも異なる地域である。彼らの有する独自の言語と固有の文化や生活については，広島（1983）や酒井（1989）などが紹介しているが，その自給的な生活様式もまた，

近年，大きく変わりはじめてきている。

日本大学では 1988 年以來，この地区において交流および学術研究のプロジェクトを推進してきており，その経緯については山内（1989）が紹介しているが，とくに学術研究では，地域の自然，農牧業，観光や生活様式の実態と変化の過程について経年的に追跡し，研究してきている。その成果のうち，地域の自然環境については藁谷（1995, 1996, 1997, 2001），Waragai（1999）が，農業に関しては水嶋（1990）が，また観光化や生活様式の変化については落合（1999, 2000, 2001, 2003）が，それぞれ報告している。これらによって，ゴジャール地区の特色やその変化の過程が徐々に明らかにされつつある。

本稿は，こうしたゴジャール地区における開発や地域振興策による地域変容の過程について注目し，2003 年の夏季における現地調査の成果をまじえて，農業形態の変化や観光化の進展が生活に与えた影響を分析することで，そこに存在する問題点について考察するものとする。

II．地域の概要

1) パキスタン北部地域の概要

山岳地域に位置する北部地域の中央部には，南アジア屈指の大河インダス川とその支流のギルギット川およびフンザ川が流下しており，その河谷沿いの集落を連ねるようにカラコラムハイウェイ（Karakoram Highway, 以下 KKH）が通じている（図 1）。この KKH は，首都イスラマバードから国境のフンジェラブ（Khunjerab）峠（4,700 m）を越えて，中国のカシュガルまでを結んでおり，国際的な交通の大動脈として重要な役割を担っている。

北部地域には 10 を超える少数民族（言語集団）が居住しており，主な言語としてシナー（Shina），バルティ（Balti），ブルシャスキー（Burushaski），コワール（Khowar），ワヒ（Wakhi）などをあげることができる（図 2）。シナーは，北部地域で最も話者の多い言語であり，使用者は中心都市のギルギット周辺地域に分布する。一方，東部のスカルドゥ周辺地域には，チベット系言語であるバル



図 1 パキスタン北部地域 .

Fig. 1 The Northern Areas of Pakistan

ティの話者が多くなっている。ギルギットからKKHを北上すると、約100 kmほどでフンザ地方に至るが、カリマバード (Karimabad) を中心集落とするフンザ地方中央部には、ブルシャスキーを使用するブルショー (Burusho) が居住している。

このフンザ地方中央部は、現代の「桃源郷」ともいわれる風光明媚な観光地として有名であり、また長寿の里としても名高い。そのため、北部地域へは、このフンザ地方を目当てに訪れる外国人観光客も多くなっている。カリマバード周辺にはこうした観光客を対象とした宿泊施設や土産物を扱う店舗が数多く立地し、一大観光地となっている。

しかしながらこのフンザ地方には一様に同じ民族が暮らしているわけではない。とくにフンザ川

沿いにさらにKKHを北上すると、上部フンザに至るが、この地区はブルショーとは異なるワヒの人々の生活舞台となっており、とくにフンザと区別するため地元ではゴジャールと呼ばれている。

2) ワヒの人々とゴジャール地区の概要

ゴジャール地区は、フンザ地方の最北部に位置し、フンザ河谷のシシュカット (Shishkat) から中国との国境フンジェラブ峠までを占めている。地区内には、ディスタギールサル (Distaghir Sar: 7,885 m) や、バツラ (Batura: 7,785 m)、シスパー (Shispare: 7,611 m)、パサー (Passu: 7,478 m) など7,000 m 峰がそびえ、これらから幾筋もの氷河が流れ下っている (図3)。ゴジャール地区の人々が暮らすフンザ河谷は、標高2,400 ~ 3,000 m にあって、乾燥が著しく、夏季の日中は気温が30℃を超える一方、冬季には-10℃以

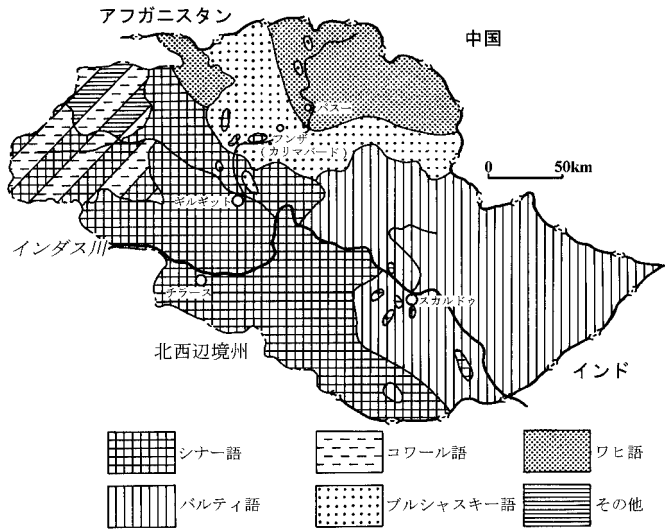


図 2 パキスタン北部地域における言語集団の分布 .
The Northern Area of PAKISTAN Physical and Human
Geography Atlas (1995) による .

Fig. 2 Distribution of language groups in the Northern Areas
of Pakistan.

下にまで下がる厳しい気候条件下にある。

ゴジャール地区に暮らすワヒの人々は、アフガニスタンのワハーン地方から移住してきた人々の末裔といわれており、同じ民族が、パキスタン、アフガニスタン、中国、タジキスタンの4か国にまたがって居住している。彼らの話すワヒ語は、ペルシャ系の言語であるが、固有の文字を持っていない。また、彼らもフンザのブルショーと同じくイスマイル派のイスラム教を信仰している。

彼らは河谷に点在する集落を拠点に、灌漑農業で小麦、大麦、エンドウといった畑作物やリンゴ、アンズなどの果樹を栽培し、集落と河谷上部の放牧地との間を移動してヤク、山羊、羊を飼育する移牧を行うことで自給的な生活を営んできた（水嶋, 1990）。こうしたゴジャール地区の生活を大きく変える契機となったのが、KKHの開通とAKRSP（アガ・ハーン農村支援事業, Aga Khan Rural Support Programme）をはじめとしたNGOによる地域開発の進展である。

KKHは、パキスタン北部地域の開発と経済発展を目指し、パキスタン中央部との物流ルートを

確保するために建設が計画された。また、1960年代、ソ連、インドに対する国際的な緊張関係の中で、戦略上、友好関係にあった中国との間を直結する交通路としても重要であった。そのため中国の強力な支援を得て建設が実現し、1978年にはイスラマバード カシガル間のKKH全線が開通した。1986年には、パキスタン、中国以外の外国人にも通行が開放されたことで、ゴジャール地区にも多数の一般外国人旅行者が訪れることになった¹⁾。また、このルートによれば、ギルギットから4～5時間程度でゴジャール地区まで到達することが可能であり、交通の利便性の向上によって、地区内にも商品経済が浸透することになった。

一方、イスマイル派の宗教指導者アガ・ハーン（Aga Khan）の基金により、1982年ギルギットに設立されたNGO組織がAKRSPである。AKRSPは、パキスタン北部の山岳地帯にある村々の地域振興を目的として設立されたもので、パキスタン政府や他のNGO、民間企業などと連携しながら北部地域および北西辺境州チトラル地方の地域開発に取り組んできた。その事業内容は、

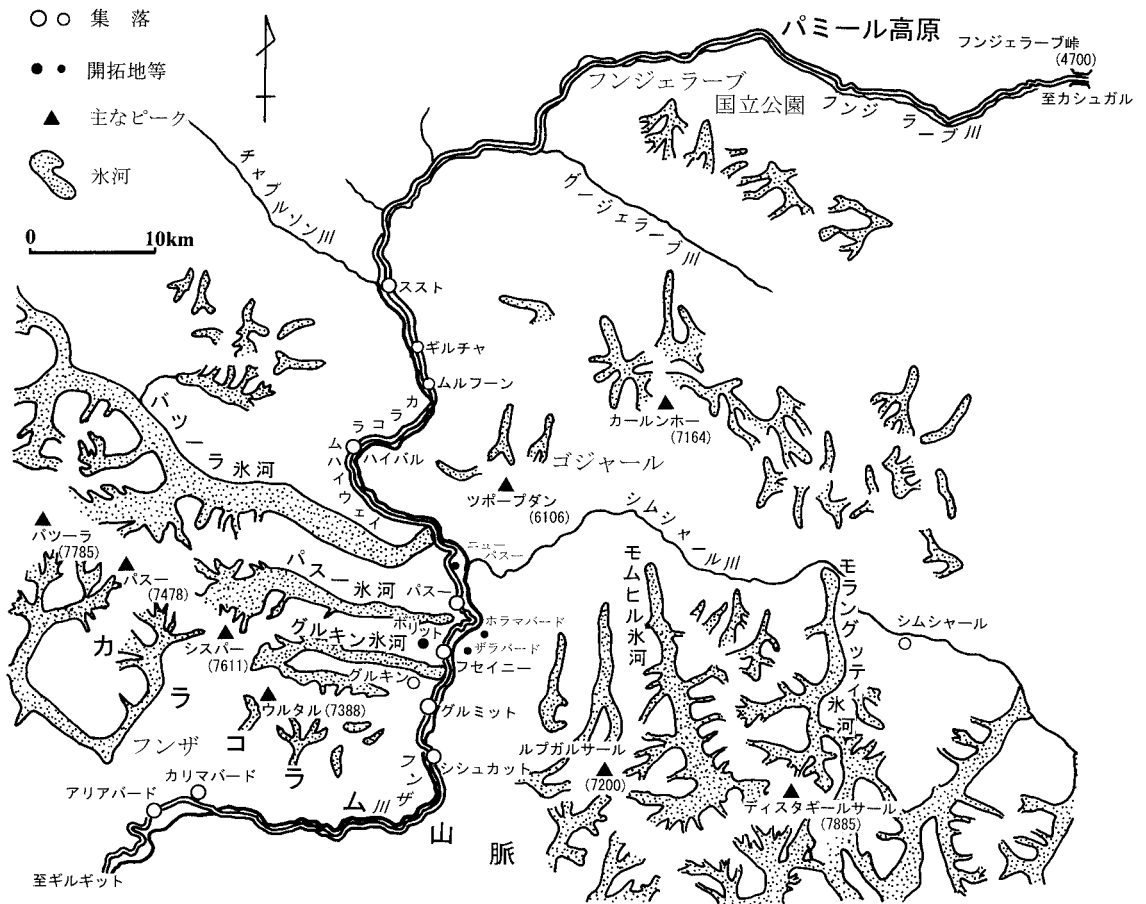


図 3 研究地域 (ゴジャール地区).
Fig. 3 Study area (Gojal).

金融、インフラストラクチャーの整備、農牧業指導、森林事業、人材育成事業などで、こうした事業展開を機能的に進めるために、VO (Village Organization) および WO (Women's Organization) の組織化が進められてきた (AKRSP, 1988²⁾)。組織活動の柱は金融業務であり、各 VO および WO では、会員からの預金と AKRSP からの借入金を原資とし、住民に対して貸し付けを行っている。住民はこの事業による融資を受けることで、住宅の新・築や自動車等の購入、自営業開業などの資金を得ている。これによりゴジャール地区では新たな事業の機会が創出され、商業や観光業など新たな産業が拡大していくことになった。ま

た、新しい農作物の導入を行うとともに、トラクターや脱穀機等を導入して共同使用するなど、農作業の機械化による農業の構造改善が進んでいる。このほか、ゴジャール地区ではインフラストラクチャーの整備も着実に進みつつある。集落の多くには上水道が敷設されるようになり、ハイバル (Khaibar) に、は小規模ながら二基の発電所が稼働している³⁾、安定的とはいえなくても電気が供給されている。このように、ゴジャール地区にも近代化の波は着実に押し寄せており、人々の職業や生活様式にも様々な形で変化が生じてきている。そこで次にその変化の実態を、主として二つの村を事例に詳述する。

III. フセイニー村における伝統的農業の変化

1) フセイニー村の概要と伝統的農牧業

標高約 2,400 m にあるフセイニー (Hussaini) 村は、フンザ川右岸の河岸段丘上、東西に伸びるグルキン氷河のモレーンの東側斜面に位置する (図 4)。村には 79 世帯、565 人 (2002 年) が居住しており、穀物栽培と牧畜を組み合わせた伝統的な農牧業を生業としてきた。生業を成り立たせる耕地は、モレーンを開墾して作り上げた本村とフンザ川対岸の扇状地上にあるザラバード (zarabad) の 2 個所であり、本村の面積が 580 Kanal (1 Kanal は約 5 a), ザラバードが 367 Kanal となっている。ここでは畑作物のほかアンズやクワ、リンゴなど、多くの果樹が栽培されてきた。牧畜は山羊や羊などの移牧の形態をとっており、夏季には村の北方に 10 km 以上離れたバツラ氷河南側の放牧地で、冬期間は村内の家屋と接する畜舎で飼養している。

この地域の伝統的農牧業は、麦類 (小麦・大麦) と豆類 (エンドウなど) を組み合わせた輪作による灌漑農業と、移牧により乳製品の製造を行う自給的なものであった⁴⁾。主食のチャパティーに利用される穀物類の栽培は、4 月上旬の播種から 7 ~ 8 月の収穫までの期間に行われてきた。穀物栽培に関わる多くの作業は、農民自らの労働によって担われているが、耕起や脱穀作業では牛を役畜として利用してきた。

厳しい自然環境の中で営まれるこの地区の農牧業は、必ずしも十分な余剰が確保できるほど生産性は高くなかった。乾燥地域の穀物栽培には灌漑用水が不可欠であり、この村でもグルキン氷河の融氷水を、村人が開削した簡便な灌漑水路で運んでくるが、年ごとの氷河の動きに応じて取水地点と取水量が変化し、途中での漏水も多かった。また、この灌漑用水は低温であり、モレーン上に立地する耕地は表土が薄いため、地力は悪く、生産性が低かった。一方、牧畜では、夏の放牧地における自然牧草の生産性に限界があり、冬の飼料は穀物栽培との関係で十分に確保できるものではなかった。このように、伝統的農牧業は多くの問



図 4 フセイニー村の全景。

フセイニー村はフンザ川 (写真手前) 右岸の斜面上にひらけた集落で、村の背後 (西側) にあるグルキン氷河から導水し、耕地を灌漑している。北部地域の重要な幹線道路であるカラコラムハイウェイ (KKH) が、村を取りまくようにして通じているのがわかる。なお、グルキン氷河のモレーンの形成には、氷河からの土石流が大きく関与している。

Fig. 4 Village of Hussaini.

題を抱えてはいたが、ワヒの人々の重要な生業として存続してきた。

ところが、KKH の開通後、急速に近代化が進展する中、KKH 沿いのこの村もその影響を強く受けた。1980 年代後半には、電気や水道が普及し、学校も建設された。耕地には換金作物が導入され、伝統的な農牧業は、貨幣経済の洗礼を受け、1980 年代から 90 年代にかけてその経営は大きく変化することになった。

2) ジャガイモ栽培の導入と定着

KKH の開通による商品経済や貨幣経済の浸透は、この地域一体の農業経営に大きな変化を与えることになった。前述のごとく、自給自足の伝統的農牧業に立脚してきた社会にも大量の商品が流入し、人々は新たな事態を受け入れざるを得ない状況に追い込まれた。その中での対応として進められたのが、販売を主目的とするジャガイモ栽培の導入と定着であった。

2003 年現在、北部地域の中でもフンザ地方を含むギルギット管区は、野菜栽培面積全体に占めるジャガイモの割合が高い (66.4%) 地域ではある。とりわけフンザ地方では、その割合が実

表 1 ギルギット管区における野菜類の栽培面積。

Table 1 Cultivated area of vegetables in Gigit region.

単位：各左欄が ha，右欄が%

	ギルギット管区 計		ギルギット地方		ナガール地方		フンザ地方	
	ha	%	ha	%	ha	%	ha	%
インゲン	157	4.9	55	9.5	69	4.4	33	3.1
エンドウ	63	1.9	21	3.6	32	2.0	10	0.9
キャベツ	176	5.4	35	6.0	124	7.8	17	1.6
カブ	212	6.6	51	8.8	131	8.3	30	2.8
トマト	243	7.5	81	13.9	128	8.1	34	3.2
ジャガイモ	2,146	66.4	286	49.1	952	60.1	908	85.3
その他	235	7.3	53	9.1	149	9.4	33	3.1
合 計	3,232	100.0	582	100.0	1,585	100.0	1,065	100.0

(2003年FAO資料による)

表 2 ギルギット管区における穀物類の栽培面積。

Table 2 Cultivated area of cereals in Gilgit region.

単位：各左欄が ha，右欄が%

	ギルギット管区 計		ギルギット地方		ナガール地方		フンザ地方	
	ha	%	ha	%	ha	%	ha	%
小麦	6,318	20.6	3,688	24.0	1,204	14.1	1,426	21.1
大麦	459	1.5	28	0.2	247	2.9	184	2.7
とうもろこし	5,180	16.9	3,415	22.2	878	10.3	887	13.1
牧草	18,741	61.0	8,237	53.6	6,234	72.8	4,270	63.1
合 計	30,698	100.0	15,368	100.0	8,563	100.0	6,767	100.0

(2003年FAO資料による)

85.3%を占めるまでになっている(表1)。フンザ地方でも、ジャガイモの栽培面積は穀物栽培の全面積6,767 haに比べれば7分の1程度ではあるが、大麦や青刈りトウモロコシの栽培面積を上回って小麦の栽培面積に近づくまでになっており(表2)、明らかにジャガイモがこの地方の主力作物になりつつあることがわかる。

フンザ地方の中でフセイニー村をはじめゴジャール地区にジャガイモ栽培が導入されたのは、1980年代前半であり、村では、その販売によって経済的自立をはかることが目的とされた。この地区は高冷地ということもあって栽培されるジャガイモの品質がイスラマバードの市場でも高い評価

を得た。そのため、栽培面積と生産量、出荷量は急増し、多くの村々では麦類や豆類の栽培を縮小してまで、その栽培に力を注ぐことになった。

こうした状況はフセイニー村において典型的に現れている。フセイニー村では1970年代まで他の村々と同様、伝統的な農牧業形態を保持していたが、1980年代のジャガイモ栽培導入後、徐々にその面積が増加していった。とりわけ、商品経済や貨幣経済の影響が強くなって現れてきた1990年代には、その面積が急増することになった。この村は地形の関係で、他の村と比較して耕地が狭く、また、観光資源となる地域資源に恵まれていなかったために、それらによる現金収入の道は閉ざ



図 5 フセイニー村の耕地。

現在、フセイニー村の耕地の大部分はジャガイモの栽培にあてられており(濃色に見える耕地)、元来この地域の主要作物であった麦類(小麦・大麦:淡色の耕地)は、ほとんど見られない。耕地を画し、また耕地へ家畜が侵入することを防ぐ目的でつくられている石垣は、礫を積み上げただけで、礫と礫とを接着・固定してはいない。この石積技術は伝統的な家屋の壁面にも用いられているが、こちらは泥土を塗り込めて固定している。

Fig. 5 Cultivated fields in Hussaini.

されていた。しかしながら、様々な商品の購入額や教育に関わる支出などは拡大し、それらを負担するに足る現金収入を得るために、ジャガイモ栽培の導入、定着が急速に進行することになる。この結果、村では図5のようにほぼ100%に近い耕地でジャガイモ栽培が行われ、しかも毎年、連作で栽培を継続している。もちろん、収穫したジャガイモの大部分は販売に回され、現金収入となっている。

一方、自給作物の栽培は、対岸のザラバードに移しているが、その面積だけでは、多くの世帯で主食用の小麦粉が不足するため、小麦粉を購入しなければならない。また、近年ではザラバードでもジャガイモ栽培を導入しているが、まだこのジャガイモは自家消費を中心としたものである。対岸から村までジャガイモを運搬するには、重い荷を担いでフンザ川にかかる危険な吊り橋を通り長い距離を歩くほかはなく、現在のところ、ここでの栽培面積は増える環境にない。

3) ジャガイモ栽培の経営と人々の生活

この地区は乾燥地域にあるため、ジャガイモ栽培にも灌漑が必要である。灌漑用水の不足は村にとっての死活問題となるため、用水路は村の組織によって共同管理されている。3月下旬になると、村全体で用水路の修理を実施するが、グルキン氷河の末端位置が毎年変動するため、取水地点はその都度修理が必要とされる。現在、この氷河の融氷水は5本の用水路により村まで運ばれるが、いずれも簡単な構造のため漏水が多く、常時、修理が求められる。

4月上旬に、耕起、畝作り、水の引き入れ、肥料(下肥など)の投入、種芋の植え込みなどの諸作業が行われるが、これらはいずれも手作業である。5月上旬には発芽するが、これ以降は土壤の乾燥を防ぐため5日間ごとに水を供給する。安定的な水量確保に問題点は残されているが、共同体意識の強い村では厳しい慣行は見られない。6月上旬には、窒素肥料を投入するが、近年この使用量は増加し、経営に対する負担も大きくなってきている。収穫時期はその年の天候により異なるが、概ね8月下旬から9月上旬になる。出荷販売は、買い付けのために訪れる業者に各世帯が個別に対応し、大きさなどにより価格を決めている。

ジャガイモ栽培の経営と生活の実態について、村のほぼ平均に等しい耕地を所有するR氏へのヒアリングを行った。氏は大学の修士コース(地理学)を2000年に修了したが、いまだに安定した職業には就いていない。現在、村ではボランティア組織の代表として村の発展に関わり、自らもジャガイモ栽培を行っている。2002年現在、氏が所有する耕地面積は16 Kanal(本村に10 Kanal、ザラバードに6 Kanal)であった。本村でのジャガイモの収穫量は、50袋(1袋は80kg)で4,000kgとなり、このうち、45袋(3,600kg)を、1袋あたり980Rs(ルピー:1Rsは約2円)で販売し、44,100Rsの収入を得た。一方、支出は窒素肥料9袋(1袋は50kgで650Rs)を5,850Rsで購入したため、差し引き38,250Rsが確保できた。これ以外では、乾燥アズを業者に販売しているが、収入はわずかであった。なお、ザラバードでは自給用のジャガイモと小麦の栽培を行って

おり、家族6人（両親と夫婦と二人の子供）の年間消費量としては十分な量を得ている。ただし現在はこの収入で支出を賄うことができるものの、子供の教育費や光熱費など今後予想される支出の増加に対応するのは難しい。したがって氏は安定した職業に就くことを希望しているが、この地区ではその解決は極めて困難である。ジャガイモ栽培と関連して、この地域が抱えている問題点が浮かび上がってくる。

4) 村の問題点と課題

ジャガイモ栽培は村や農家の経済的自立にとって欠くことのできない作物になったが、いくつかの問題点も指摘される。第1点は灌漑用水の安定的な確保である。乾燥地域のジャガイモ栽培では生産量を安定させるために、灌漑用水の安定した確保が必要となるが、現実には氷河の末端位置の変動によって取水場所は不安定となり、また、簡単な用水路のため破損が激しく、常に水不足が起きている。この対策として、隣村のグルキン村から新たな用水路を引く計画があるものの、費用の問題もあり、建設の見通しは立っていない。第2点はジャガイモの生産性を安定させるため、低い地力を補う化学肥料の投入が必要不可欠なことである。しかし、その価格は高く、多くを投入すると利益が確保できない。代替策としては堆肥の投入が考えられるが、その量も不足している。第3点は連作障害である。化学肥料への依存と連作のため、近年、生産性と品質が低下し、大きな問題となっている。他産業導入の可能性に乏しい現実が、村の農業をジャガイモ栽培に特化させてきたため、この状態から抜け出すことは極めて困難でもある。伝統的農業で行っていた麦類と豆類の輪作に戻すことで地力の回復をはかる必要があるものの、現金収入を必要とする生活の中であって、それも難しい状況である。

IV. パスー村における生活の変化と観光業

1) ゴジャール地区の観光資源と観光施設

ゴジャール地区は、前述のごとく雄大な自然景観に恵まれている（図3）。加えてこの地区には、フンジェラプ国立公園を中心にマルコポーロ

シープなどの希少動物が広く生息し、針葉樹の原生林や放牧地も点在している。こうしたことから、この地区は登山やトレッキングといった山岳観光のポテンシャルが非常に高いといえることができる。また、ワヒの人々が維持してきた農村景観や農牧業に依拠する固有の伝統文化もこの地区における魅力的な観光資源として捉えることができる。とりわけ、こうした観光資源が、KKHという自動車道から近いところに位置し、一般の旅行者にとってもアプローチが容易な点は、パキスタン国内では他に類を見ない。たとえばフンザ河谷のグルミット（Gulmit）からパスー（Passu）付近では、KKHの間近まで氷河が流下しているため、わずかな時間で氷河に触れるトレッキングを楽しむことが可能である。また、KKHは4,700mもの高所を自動車で越えることができる世界的にもまれなルートであり、中には自転車で行く旅行者もあって、それ自体が重要な観光資源とみなされている。このようにゴジャール地区は豊かな観光資源と多様な観光の可能性を有しており、観光客の増加による観光収入の増大を期待する地域住民によって、地区内における観光業への取り組みが活発化し、観光施設の拡大が進んでいる。

表3は、ゴジャール地区におけるKKH沿いの集落の宿泊施設や店舗等の立地状況を示したものである。とくに宿泊施設が多く立地するのは、ススト（Sost）、グルミット、パスーの3村である。

ススト村は、KKH沿いの村としてはゴジャール地区で最も北に位置している。集落の2kmほど北にある出入国管理事務所付近には、ゴジャール地区で最多となる12軒の宿泊施設が立地し、100を越す店舗群が軒を連ねる。また、2軒の銀行や、交易業者の事務所、あるいは食堂なども見られ、国境のまちとしての賑わいをみせている。集落近くのかつて出入国管理事務所があった付近（旧ススト）にも、KKH沿いに郵便局や数軒の自動車修理・部品販売店とともに2軒の宿泊施設が立地する。グルミット村は、ゴジャール地区最大規模の集落で⁵⁾、行政施設や郵便局、銀行、診療所、高校などが立地するゴジャール地区の中心地である。KKH沿いと村の中央部にあるポログラ

表 3 ゴジャール地区の KKH 沿い集落における観光施設等の立地数 .

Table 3 Number of lodging establishments and other facilities in each village along KKH in Gojal.

	宿泊施設	店舗	食堂	銀行	その他
ススト (Sost)	12	137	7	2	入管 税関 交易商 Office 9 郵便局
旧ススト (Old sost)	2	21			
ギルチャ (Gircha)	1	0			
ムルフーン (Murkhon)	1	7			軍施設
ハイバル (Khaiber)	1	1			
パスー (Passu)	6	4	3		
フセイニ (Hussaini)	0	4			
ボリット (Borith)	1	0			
グルキン (Gulkin)	1	3			
グルミット (Gulmit)	7	44	4	1	役所 郵便局 診療所
シシュカット (Shishkat)	1	11	1		

(2003 年の現地調査による)

ウンド周辺に、合わせて 42 軒の店舗が立地しており、それらの間に 7 軒の宿泊施設が点在している。

パスー村は、これら 2 村に比べると村の規模が小さく、店舗数も少ないが、6 軒の宿泊施設を擁する観光拠点となっている。これは、パスー村がパスー、パツラの両氷河に近く、シムシャル渓谷へ向かうルート上の分岐点にあるという、立地条件によるところが大きい。すなわち、パスー村は、ゴジャール地区の中でもとくに各観光資源へのアクセスが容易であることから、山歩きを目的とした観光客が集中する地域であり、そうした観光客を目当てに宿泊施設が立地することになった。そこでここでは、観光と関わりが深いパスー村を取り上げ、その生活実態について、家計の状態などにより分析を行う。

2) パスー村における生活の実態

パスー村は、前章の事例フセイニー村の北にある世帯数 104、人口 827 人 (2002 年) の村である。本村はパスー氷河の末端から流れ出す川がフンザ川に注ぐ地点にあり、開拓地として KKH に沿った北側のジャナバード (Janabad; ニューパスーともいう) と、フンザ川の対岸にあるホラマバード (Khuramabad) の二つがパスーに帰属している。

表 4 は、パスー村における 3 世帯の 2002 年(た

だし、B の世帯は 2001 年)における家計の概要を示したものである。

A はパスーの集落内において店舗を営んでいる男性 (39 歳) の世帯である。農業による収入はおよそ 60,000 Rs で、このうち 50,000 Rs がジャガイモの売上げによるものである。ジャガイモ以外の農業収入は、主として自家で飼養するニワトリの卵を販売して得られたもので、10,000 Rs 程度であった。店舗経営による収入も農業収入とほぼ同じで、50,000 Rs 程度となっており、農業と店舗経営により、合わせて 110,000 Rs 程度の収入を得ている。

B は、宿泊施設を営む男性 (65 歳) の世帯である。収入の中では宿泊施設経営によるものが 200,000 Rs⁶⁾ で、大半を占めている。このほかに農業収入として、ジャガイモの販売により 15,000 Rs を得ている。この世帯では、経営する宿泊施設の食事用にも自家栽培のジャガイモを大量に使用するため、販売額は少なくなっているものと考えられる。

C は、教員として働く夫婦 (男性: 43 歳, 女性: 37 歳) の事例である。二人の教職による収入の合計は 156,000 Rs である。この世帯でも、ジャガイモの販売による収入は、20,000 Rs 程度となっている。

表 4 パスー村における 3 世帯の家計の概要 .

Table 4 Outline of incomes and outgoes of three families in Passu.

収入・支出の単位は Rs

家族構成	A	B	C
	68・(62)・39・ (27)・12・10・ 8・(6)	(93)・65・(45)・ 25・22・(20)・ 17・(14)・11・9	43・(37)・(19)・ (15)・(13)・ (10)・8・4
家計支持者の主たる職業	店舗経営	宿泊施設経営	教員
・主な収入			
農業	60,000	15,000	20,000
その他の主業	50,000	200,000	156,000
・主な支出			
食料品	22,400	15,700	24,600
うち小麦(粉)	7,000	7,500	6,000
うち米	3,000	3,000	4,500
うちその他	12,400	5,200	14,100
服飾品費	10,000	10,000	20,000
光熱費	2,500	17,000	6,000
教育費	10,000	40,000	24,000
農業経費(肥料代等)	10,000	20,000	7,000
農地	小麦 1 ジャガイモ 5 その他 2	小麦 4 ジャガイモ 4	小麦 1 ジャガイモ 1

家族構成の数字は年齢。()は女性・斜体は主たる家計支持者 .

収入・支出は A・C が 2002 年, B が 2001 年の 1 年分 .

主な収入には, 臨時的副収入を含まない .

農地の数字は畑の面数(正確な面積は不明) .

(2003 年の現地調査による)

前章のフセイニー村と同様, パスー村でもジャガイモは, それぞれの世帯において大きな収入源となっている。実際に Mutabiat Shah (1998) の調査によれば, 村の耕地の約 75% はジャガイモもしくは野菜の栽培にあてられており, その大半はジャガイモの耕作地であることから, パスー村もまた農業においてはジャガイモ栽培に特化した村であるといえることができる。しかしながら事例の世帯では農外収入の割合も高く, とくに B および C の世帯では, 農外収入がジャガイモによる収入をはるかに凌いでいる。むろん, B の世帯では生産されるジャガイモが自営の宿泊施設で利用され, 必要経費を相殺していることを考慮すれば実

質的には宿泊施設経営による収入のうちの相当額をジャガイモによる収入として見積もるべきではある。しかしながら, それも原価で計算できることから農外収入が大きいことは間違いない。いずれにしても B, C の世帯では, 農外収入が大きいことからジャガイモの販売収入への依存度は低く, 自家耕作地の中でジャガイモの占める割合は小麦とほぼ同程度の低い水準にとどまっている。

これら 3 世帯は, パスー村の一般的な事例とはいえないまでも, 決して特殊な事例ではない。実際に, パスー村では, 宿泊施設や店舗の経営の他にも観光客を対象とした職業に従事するものは多い。たとえば, 自動車を所有して, 観光客の輸送

を行う運輸業に携わるものも見られる⁷⁾。また、ギルギットやイスラマバードの旅行社と契約し、北部地域ツアーを率いるツアーガイドとして活躍するものもあり、そうした職業への従事者は高額収入を得ている⁸⁾。

このほかにも、村における農業のかたわら、外国人観光客のトレッキングに現地ガイドやポーターとして関わるケースは多い。パスー村では、夏季を中心にトレッキング目的で訪れる外国人に、村の窓口を一本化して対応する「パツラ氷河・放牧地ツアー」のシステムを運営している。北部地域屈指の長さを誇るパツラ氷河は、パスー村のすぐ背後にあって村からのアプローチが容易であり、その左岸側の斜面にはパスーの放牧地も点在する雄大で美しい景観に恵まれるため、格好のトレッキングエリアとなっている。2001年より開始されたこのシステムは、ポーターの適正な派遣を行い、旅行者の便宜と環境の保全をはかることが目的である(落合, 2003)。村の男性の多くがこのシステムのポーターに登録しており、交代でトレッカーの需要に対応することで、公平に収入を得ることができるようになっている。また、英語を話すことができる若年者を中心に、外国人トレッカー相手の通訳兼現地ガイドを引き受けるものも少なくないことから、農業やその他正規の職業に伴う収入の他に、観光に関連する相当額の副収入があるものと考えられる。さらに、農牧業においてもAの世帯のように、野菜や卵等を村内の宿泊施設の経営者などに販売したり、山羊や羊などの家畜を観光客の食料に提供するケースも見られる。したがって、こうしたケースまで含めれば、正確なところは不明ではあるが、村の大半の世帯は、その額の多少はあっても何らかの形で観光に関わる収入を得ているといつてよい。

一方、収入の拡大に対応して、各世帯における支出も拡大し、多様化している。たとえば、いずれの世帯も年間6,000～7,500Rsの小麦粉を購入しており、3,000～4,500Rsを米の購入代金に充てている。小麦は本来であれば自給していた食品であり、米は従来の食習慣にはないものである。また、購入する食品には、食用油や肉類、香辛料

なども多く、これらが支出の中で大きな割合を占めるようになったことが、村における農業の変化、生活様式の変容を端的に物語っている。また、光熱費には電気代の占める割合が高く、ボンベ入りプロパンガスの使用量も含まれる。村の一般家庭では、煮炊きの燃料として従来のように灌木の枯れ枝などをを用いることが多いものの、電灯などの使用は一般化している。中にはBの世帯のように、テレビや洗濯機のような大型の家電製品を所有し、高額な光熱費を支出する例もあり、石と泥で壁を固めた伝統的な家屋の屋根にパラボラアンテナが載る、奇異な光景も散見されるようになった。

この地区における世帯の支出として大きな割合を占めるものに教育費がある。パスー村には、アガ・ハーン教育事業(Aga Khan Education Service, AKES)が運営する小中一貫のDJ学校がある。DJ学校は、アガ・ハーン三世(在位1885～1947)の即位60周年(Diamond Jubilee)を記念して設立がはじまった学校で、ゴジャール地区の各村々にも置かれており、パスー村では児童のほぼ100%が、この学校に通って教育を受けている。学齢期の児童がいる世帯では、DJ学校に授業料を支払うほかに、書籍や文具代も必要となる。また、DJ学校卒業後は村外の高等学校へ通うものも多く、さらにはギルギットやイスラマバード、カラチなどの大学に進学するものもある。これら上級の学校にかかる学費は、家計に大きな負担とはなるが、それでも、子弟を都市の学校に送り出す家が多い。ただ、この教育水準の高さがゴジャール地区の地域振興を推進する原動力にもなっており、Cの世帯のように教育職などの専門職に就く人々も増加し、生活様式の変化を促すことにもつながっている。

以上のようにパスー村においては、現金収入を得る道として、ジャガイモをはじめとした商品作物の栽培に特化するのみならず、観光関連産業などにも深く関わることで、収入を拡大していることがわかる。こうした現金収入を必要とする背景には、地域の変容に伴う生活様式の変化があるが、現金収入の拡大は、さらなる生活様式の変化を生み出し、各世帯における支出の増大を促している。

表 5 パスー村における3宿泊施設の年度別、月別宿泊者数。

Table 5 Number of lodgers of three lodging establishments in Passu.

P Inn													
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1998	0	0	0	31	51	56	66	67	41	68	14	17	411
1999	10	2	16	26	44	54	58	51	58	32	20	8	379
2000	4	5	17	24	77	39	59	112	56	49	20	7	469
2001	2	10	36	16	64	58	113	129	65	4	0	1	498
2002	4	2	8	9	28	10	10	24	41	26	8	3	173
2003	5	2	6	13	14	36	34	21					131

B Inn													
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1998	0	2	0	13	52	35	88	76	56	46	19	5	392
1999	1	4	5	19	69	59	61	84	50	55	10	0	417
2000	0	5	1	28	61	40	77	80	53	40	4	0	389
2001	0	0	1	20	31	30	65	97	48	4	0	0	296
2002	0	1	2	4	5	4	6	11	18	6	1	2	60
2003	0	0	0	0	7	5	9	8					29

S Hotel													
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1998	0	0	13	14	8	10	31	33	19	12	2	0	142
1999	0	0	0	11	7	16	86	96	18	0	0	0	234
2000	0	0	0	5	12	34	61	59	34	37	3	0	245
2001	0	0	0	5	17	51	124	122	36	0	0	0	355
2002	0	0	0	4	3	3	4	6	4	0	0	0	24
2003	0	0	0	1	19	12	27	16					75

2003年は8月20日までの宿泊者数。
(2003年の現地調査による)

3) 観光業の現状と問題点

ただし観光業への過度の依存には問題も多い。

表5はパスーにおける宿泊施設のうち3軒の、月別利用者数とその推移を示したものである。観光客の滞在は、7・8月をピークとして夏季に集中している。これは、ゴジャール地区が比較的冷涼な気候とトレッキング等の活動に特徴づけられる夏季観光中心の地域であることによる。厳寒のためフンジェラブ峠も閉鎖され、中国との国境越えができなくなる冬季は、旅行者の足も遠のく

時期である。このように夏季に観光客が集中することは、すなわち農繁期に観光業の繁忙期が重なることにもなり、小規模な個人経営によって農牧業と兼業するパスー村の観光業者は、過重労働になる可能性が生じる⁹⁾。世帯人員が多ければ、家内での分担により多少は負担を軽減することができるものの、農牧業生産に関わる労働への影響は免れない。

また、1998年以來の宿泊者数の推移を見ると、2001年の9月までは漸増の状態が続いていた。し

表 6 S Hotel における月、国籍別宿泊者数（2001 年）.

Table 6 Number of lodgers of S Hotel by Nationality.

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	計
パキスタン		1	1	3	3		8
日本	5	3	3	11	33	6	61
その他のアジア		2	3	2			7
合衆国			11	16	11		38
カナダ		4	2	14		1	21
オーストラリア		2	3	3	2	5	15
ニュージーランド				2	2		4
イギリス			7	13	9	8	37
ドイツ			6	15	11	4	36
フランス			7	14	17	1	39
オランダ		2	5	2	3	2	14
イタリア				15	6		21
スイス		3	1	9	7	6	26
チェコ			1		3		4
ベルギー				2	3		5
オーストリア				2		1	3
スペイン					6	1	7
その他のヨーロッパ			1	1	6		8
その他						1	1
計	5	17	51	124	122	36	355

（2003 年の現地調査による）

かしながら9月11日における米国の同時多発テロと、それに続くアフガニスタン戦争の影響は大きく、それ以降、観光客数は急激に減少している。2002年には前年比3分の1ないしは1割以下にまで落ち込んでおり、2003年もイラク戦争や国境を接する中国でのSARS禍の影響で、観光客回復の兆しが見えないでいる。同年8月における調査時点でも観光客の姿は少なく、宿泊施設の経営者からはやり場のない嘆きの声がかかれた。

表6は、宿泊施設Sの2001年における、国籍別宿泊者数を示したものである。宿泊者には日本人のほか、フランス、アメリカ、イギリス、ドイツといった欧米人が多い。この傾向は、他の宿泊施設についても同様であり、以前に実施した調査でもほぼ同じ傾向が見られた。すなわち、パサー村の観光は、先進諸国を中心とした外国人観光客に大きく依存して成立している。なかでも日本人

の宿泊者数が最も多くなっているが、これもまたゴジャール地区のホテルに共通の傾向である。パキスタンへの入国者数を国籍別に見ると日本人は第7位（2001, Government of Pakistan, Ministry of Minorities, Culture, Sports, Tourism and Youth Affairs, 2002による）であったことから、日本人観光客の中にはゴジャール地区にまで足を運ぶものが比較的多かったということになる。したがって2002年に、日本人が国際情勢に過敏に反応して海外渡航を控えたことは、ゴジャール地区における観光客落ち込みに少なからず影響している。いずれにしても、国際情勢を反映して来訪者数が大きく変動する外国人に依存せざるを得ない現状は、ゴジャール地区の観光業の大きな問題点といえよう。

また、パサー村をはじめゴジャール地区の宿泊施設には、KKHが外国人に開放された1986年以

降に開業したものが多く¹⁰⁾、地区内には現在もお建設中の施設がある。これらの経営が今まで継続し得たことは、KKH が外国人に開放されて以来、観光客の来訪が増加し、堅調に推移してきた証しともいえるが、それらが過当競争の様相を呈してきているのもまた事実である。

パキスタンはインドとの係争地カシミール地方の問題を抱えており、政情が不安定なアフガニスタンやその他の西アジア諸国とも関わりが深い。したがってゴジャール地区が、国際観光地として外国人観光客を安定的に集めることは、未だ難しいのが現状であり、観光業に過度に関わることはリスクが大きい。

V. ゴジャール地区における開発の課題と可能性

1) 地域振興の現状における課題

ゴジャール地区では、KKH 開通に伴う流通の向上と AKRSP をはじめとした NGO 組織による地域振興の諸策によって、その社会・経済的な構造が大きく変わりつつある。とりわけ、ジャガイモに代表される商品作物の導入と拡大、観光業への傾倒は著しいが、それにも各村の立地条件の違いによる差異が認められる。

フセイニー村は、その立地条件から観光業による地域振興を進めることが難しかったために、地域の経済的發展をはかる方策として農業における現金収入拡大の道、すなわち商品作物としてのジャガイモ栽培を特化させてきた。その結果、村の耕地の大部分がジャガイモの耕作地へと変わり、住民はその連作によって生活に必要な現金収入を得ている。パサー村でも、村内におけるジャガイモ栽培を拡大してきたが、一方で観光業にも積極的に関わり、宿泊施設や店舗、運輸業を営み、ジャガイモの販売額を上回る収入を得る事例も見られた。これには、山岳観光資源への近接性がゴジャール地区の中で最も高いというパサー村の位置的な優位性が大きく作用している。

こうした各村の位置的な条件の差異が、それぞれに目指す地域発展の方向性の違いに結びついていることは事実である。そしてそこにはまた、各々に特有の問題も生じている。

フセイニー村では、ジャガイモ栽培に特化したことで、短期的には現金収入を拡大することができたものの、連作障害の顕在化が経営の不安定要因となり、各農家、さらには村の発展の持続性が疑問視されるようになってきている。また、パサー村では、観光業に携わることで高収入を得る事例も生じたが、不安定な国際情勢の影響でゴジャール地区を訪れる観光客が急減し、観光業は一転して厳しい経営状況に追い込まれている。すなわち、対応が極端に一つの形態に特化したそれぞれの事例は、様々な問題を招来することになったが、こうした現状は、この地区が、未だ目指すべき正しい地域振興の方向性を見出していないことを示している。

2) 持続的な地域振興の可能性

ゴジャール地区には今なお十分に活用されずに残されている地域資源は多い。自然環境の一部は観光資源として利用されているが十分とはいえない。たとえば、フセイニー村の場合も、村の背後にあるポリット湖やグルキン氷河、ザラバードへの吊り橋は観光資源として利用することも可能でありながら、村の地域振興に結びつけられていない。確かに地域の発展を目指す上で、不安定要素の多い観光業に過度に依存することのリスクは大きいですが、ゴジャール地区の地域資源の有効活用には観光業によるのが最良の方法でもある。したがって、むろん適正な範囲にとどめる必要はあるが、むしろ積極的に観光化を進めることが、ゴジャール地区の地域振興には必要である。

そのためには、エコツーリズムの実現が適切な道と考えられるが、たとえば前述したパサー村における「バツラ氷河・放牧地ツアー」は、エコツーリズムの実践例として評価することができる。このツアーと同様なシステムは、グルキン村などゴジャール地区内の他村でも実践例が見られる。ただし、こうしたツアーでは自然景観だけでなく文化的景観としての放牧地もまた重要な魅力となるため、その経営を維持し、良好な環境を保つように配慮しなければならない。

これはまた、本村の農業についても同様であり、これまで農村景観を保全してきた、麦、豆類の輪

作による伝統的な農業形態を維持していくことは重要である。もちろんジャガイモは、現金収入を得るために最も重要な作物であり、金銭的な支出が増大した今日の生活を支えるためには、その生産をやめ、従来の自給的な農業に戻すというのは現実的でない。ただ、連作障害を防ぎ、化学肥料の過投入による環境への負荷を軽減するためにも、フセイニー村に見られるようなジャガイモ生産に特化した現状は是正されなければならない。その場合、ジャガイモの減収分を補うために、他の換金作物や観光業などの他産業を導入する必要もあると考えられる。これについてもたとえば、農外収入の増加によってジャガイモの生産が抑えられ、結果、自給的な麦類の生産に回帰する傾向が見られたパスー村の事例が参考になるかも知れない。

また、地産地消とでもいうべきゴジャール地区内における産業間での連携も必要である。パスーにおける宿泊施設では、野菜や果実などは自家や村内で生産されたものを利用していたが、穀物類や肉類、調味料などの食材はギルギットなどで購入したり、あるいは北西辺境州などから訪れる業者から調達していた。これらを可能な限り村内あるいはゴジャール地区内の村落間で補完し合うシステムを確立できれば、地域内における格差を是正することにもつながると思われる。もちろんこうした企画を推進していくためには、村内あるいは村をこえた人々の組織化が求められることはいうまでもない。

パスー村におけるツアーのシステムは、PRP (Passu Reform Panel) という村の委員会によって企画され、実践にうつされている。PRP は、PDO (Passu Development Organization) を頂点として村内に結成、運営される組織の一つであるが、こうした地域振興のための組織が、村人の発意によって結成され、機能している点にこそ大きな価値がある。もちろんこうした基礎には AKRSP の指導によって設立された VO, WO があり、村の自治組織の伝統やこれらを自ら運営、成長させてきた村人たちの経験が生きている。このように村を組織化することで意思統一を図り、地域振興の指針を定めた上で具体的な施策を企画・

実践していくという手順を踏むことが、バランスの取れた地域振興を推進する適正な道であると思われる。

さらに、こうした自治的組織の広域化、高度化を推進する上で、人材もまた重要な地域資源になると考えられる。ただ、前述の通りゴジャール地区の人々の教育水準は高いものの、残念ながら、多くの有為な人材が地区外に流出してしまっているのも現実である。完全に地区外へ移住してないまでも、ツアーガイドなどのいわば出稼ぎによる収入に依存しているケースは多い。こうした人々も地区内に居住するだけの魅力と就業の機会があれば、地区内にとどまり、あるいは戻ってくるものと考えられる。その実現が可能な地域振興策の求められるゆえんである。

VI. おわりに

パキスタン北部地域のゴジャール地区では、KKH の開通以降、交通の利便性が向上、物流が増大し、自給的な村々の生活の中に商品経済がもたらされた。さらに外国人に対して KKH の通行が開放されると、豊かな自然景観を求める多くの観光客の来訪を迎えることにもなった。一方、AKRSP による諸事業の展開は、この地区の産業構造に変化を与える大きな機会となった。

本稿では、こうした開発や地域振興策が、住民の生活に与えた影響や問題点について地区内の 2 村における調査に基づき分析・考察した結果、以下のような知見を得るに至った。

農業面においては、たとえばフセイニー村において顕著に見られるように、ジャガイモ栽培が拡大し、自給的な穀物・豆類の栽培は急減した。ジャガイモ栽培の拡大は、確かに短期的には多くの現金収入をもたらすことになったが、伝統的な輪作形態の縮小で連作障害などが顕在化、こうした農業の不安定な側面も露見し、村や農家の存続自体が揺らいできている。また、パスー村の事例に顕著な通り、ゴジャール地区では宿泊施設、店舗の経営や運輸業などに深く関わることで、生活様式を急激に変化させてきた経緯がある。ただし外国人観光客の動向に大きく左右されるこうした

産業は、今日のような不安定な国際情勢下では、入込み客数が低下し、極めて厳しい経営状況に追い込まれることにもなる。

すなわち、特定の作物や産業への特化はリスクが極めて大きく、結局のところ地域の存続を危うくさせることにもなりかねない。むしろ地域の持続的発展には、その伝統的な農牧業生産の形態やそれらに基づく地域固有の文化を維持することが重要であり、商品作物の栽培や観光業は適正な範囲の中で導入しながら、地域における生産環境の多様性を推進する必要がある。このように伝統と開発のバランスを維持し相互の調整をはかる上では、地域内住民の組織化と村落間の連携は重要であり、そのためにも高い教育水準の下で輩出される有為な人材の活用が大いに期待される。

いずれにしても、ゴジャール地区の地域資源が持つ可能性は未だ十分に活用されてはならず、それらを活かすためにも、ここまでに明らかになった問題点を整理し、残された課題を克服しながら、地域の事情に即した地域振興を実現することが求められる。

注

- 1) SP's office in Gilgitによれば、ギルギットを訪れた外国人は、1985年に4,500名だったものが、1986年には9,253名へと倍増しており、ゴジャール地区を訪れる外国人旅行者も増加した。
- 2) 2000年末現在、ゴジャール地区を含めたフンザ地方では、102のVOと107のWOが組織されており、会員数はそれぞれ6,506, 5,750となっている。
- 3) ハイバルにある発電所はいずれも水力によるもので、1号機が1987年に、2号機が1998年に運転を開始している。しかしながらいずれも500KW程度の能力しかなく、動力となる水の供給も天候による影響を受けて不安定なため、需要に見合う安定的かつ十分な電力が供給できているとはいえない。
- 4) たとえばゴジャール地区の伝統的な農業については、元来の土地利用形態を残す1988年、1989年当時のシムシャル村の事例が、水嶋(1990)により示されている。それによれば耕地の大半は小麦、大麦、エンドウの栽培にあてられており、それらの輪作によって農地を維持してきたことがわかる。
- 5) グルミットはいくつかの小集落に分かれるが、総計で285世帯、2,241人(2002年現在)が居住するゴジャール最大の集落である。
- 6) 2002年は例年に比べ極端に観光客が少なかったため、ここでは、例年に近い2001年の数字を示している。

7) パサー村には2003年現在、ワゴン車が1台、ジープが6台、4輪駆動車が1台あり、それぞれ所有者が運転し、観光客の足として活躍している。パサー村のある世帯での調査(2001年)によれば運輸業による収入は、年間で100,000Rs程度であった。

8) イスラマバードの旅行社に所属していた村の男性への聞き取りによれば、ツアー期間中、一日に1,000Rsの報酬が得られるとのことであった。

9) 実際に、夏季には労働時間が長くなる傾向もある。たとえば、パサー村内のある宿泊施設のマネージャー(パサー村出身者)への聞き取りによれば、夏季には宿泊施設での労働に時間をとられるため、睡眠時間は午後12時から午前5時と冬季よりも3時間程度短くなっている。

10) 落合(2000)および、2003年の調査によれば、たとえばパサー村の6施設のうち、表5のP Inn(1984年開業)、B Inn(1974年開業)、S Hotel(1985年開業)以外の3施設はそれぞれ1996年、1997年、2003年の開業で、いずれも新しい。また、ストにあるホテルの大半も、1986年以降の開業である。

文 献

- Aga Khan Rural Support Programme(1998) *Fifteenth Annual Review*. Aga Khan Rural Support Programme.
- Government of Pakistan, Ministry of Minorities, Culture, Sports, Tourism and Youth Affairs (2002) *Tourism in Pakistan 2001 Report*.
- 広島三朗(1983) シムシャル. 季刊民族学, **23**, 52-59.
- 広島三朗(1987) カシュミールと「北方地域」. 小西正捷編: もっと知りたいパキスタン. 弘文堂.
- Kreutzmann, H. (1993) Challenge and response in the Karakoram: Socioeconomic transformation in Hunza, northern areas, Pakistan. *Mountain Research and Development*, **13**, 19-39.
- 水嶋一雄(1990) パキスタン北部地域の農耕 シムシャル村の場合. 地理誌叢, **31**(2), 54-61.
- Mutabiat Shah (1998) *Socio-Economic and Cultural Changes in Passu-Gojal (Hunza)*. Aga Khan Rural Support Programme core office, Gilgit.
- 生井貞行(1982) カラコルム紀行(1) パキスタンの農村から. 地理, **27**(1), 81-86.
- 子島 進(2002) イスラームと開発 カラコルムにおけるイスラーム派の変容. ナカニシヤ出版.
- 落合康浩(1999) パキスタン北部地域パサー村における住民の生活実態. 地理誌叢, **40**(2), 52-64.
- 落合康浩(2000) パキスタン北部地域ゴジャール地区の観光地化と地域変容. 地理誌叢, **41**(1-2), 31-43.
- 落合康浩(2001) パキスタン北部地域ゴジャール地区におけるエコツーリズムの可能性. 地理誌叢, **42**(2), 27-38.
- 落合康浩(2003) パキスタン北部地域パサー村における生活様式の変化 住民の地域振興策・観光業への取り組み. 日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀

- 要」, **38**, 19-27.
- 酒井嘉昭 (1989) シムシャル村の自然と生活. 地理, **34**(7), 115-118.
- 藁谷哲也 (1995) ランドサット MSS データに基づくカラコラム山地北西部, フンザ・バレーの地形分類. 日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」, **30**, 23-36.
- 藁谷哲也 (1996) カラコラム山地, フンザ・バレーにおける巨礫表面温度の通年観測. 日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」, **31**, 69-80.
- 藁谷哲也 (1997) カラコラム山地・フンザバレーにおける岩石表面温度と気温の日変化. 地理誌叢, **38**(2), 62-70.
- Waragai, T. (1999) Weathering processes in rock surface in the Hunza Valley, Karakoram, North Pakistan. *Z. Geomorph. N.F., Suppl. -Bd.*, **119**, 119-136.
- 藁谷哲也 (2001) カラコラム山地, バトウーラ氷河末端のモレーンに発達するカルクリートの形成過程. 地理誌叢, **42**(2), 1-9.
- Weeks, R.V. ed. (1984) *Muslim Peoples: A World Ethnographic Survey*. 2nd ed. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 2vols.
- 山内英樹 (1989) カラコラムの“夏” '88 シムシャル村夏季交流大学を終えて. 地理, **34**(6), 88-92.
- (2003年12月11日受付, 2004年3月25日受理)